太宰府の文化財 461

宝満山磨崖仏 ―第1号磨崖梵字仏― 鎌倉時代後期

本市の北東部にある宝満山（標高829m）の山中に露頭している石の崖に、磨崖仏と呼ばれる仏を示す種子（神仏を示す梵字）が数カ所彫られています。そのうちの1つは現在、中宮跡と呼ばれ、絵図には大講堂があったとされる場所（標高800m付近）の北側に鎮座する巨岩に彫られています。江戸時代の書物『筑前国続風土記附録』「竈門山神社図」によればこの巨岩の前には役行者堂と護摩壇などがあったようです。この巨岩は高さ5mに及ぶもので、中宮跡の背面側の上部に2つの種子が左右に並んで彫られています。径0.8mの巨大な輪（月輪）が左右にあり、その中に、向かって右手にはアーンク（aṃḥ）、左手にバーンク（vaṃḥ）の種子を薬研彫りしています。これらは荘厳体とも五点具足ともいわれる特別な種子で、元の種子は胎蔵界大日如来を示すア（a）と金剛界大日如来を示すバン（vaṃ）です。この種子の中央下に以下の銘文が彫られています。

工彫藤原廣□※」　文保二戊午九月上旬」　法眼幸榮十六度」

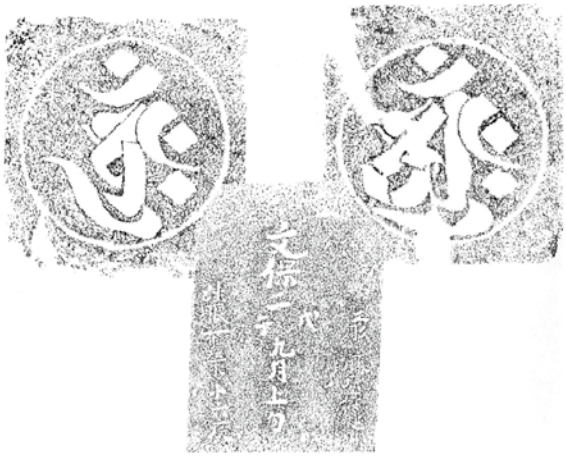
これにより、この磨崖仏は藤原廣□（※□は文字不明）という石工によって彫られたもので、彫られた年は、文保2年（1318）九月上旬であること、また依頼者は、法眼幸榮という修験者（山伏）で、おそらくは彼の入峰16回目の記念として彫らせたものと考えられています。

今回は彫られた種子からこの磨崖梵字仏について考えてみたいと思います。2つの種子は大日如来という密教教主の慈悲を表す胎蔵界と智慧を表す金剛界という2つの曼荼羅（仏の世界）を示しています。この2つの世界を併せて両部、両界、金胎と言い、2つの世界が一体という意味で金胎不二とも称せられています。胎蔵界の根本仏教経典は『大日経（大毘盧遮那成仏神変加持経）』で、金剛界の根本経典は『金剛頂経』です。これら両部を重要視するのは真言密教とされています。両部の種子を並べる磨崖仏は全国的に見ても少数で貴重です。最澄、円仁以来、天台宗と縁が深い宝満山ですが、この磨崖梵字仏をみると真言密教との関わりも感じられ、宝満山の初期修験道の成り立ちに関係する重要な文化遺産であることがわかります。他にも14世紀前半には両部神道、真言神道と呼ばれる神仏習合思想に基づいた真言宗系の仏教神道も誕生しているため、修験道のなかでこれらの両部（金胎）種子がどのように取り入れられたかなど不明な点も多く、今後も研究を進めていくことが肝要と思われます。

宝満山磨崖仏の他の事例は明治の廃仏毀釈により破壊された例が多く、完全に残っているものはわずかです。残された貴重な文化遺産の研究を進め、文化遺産を次世代に確実に継承していくことが必要です。

文化財課　髙橋　学

注）法眼とは法眼和尚位の略称で、僧位の第2階です。僧階での僧都にあたります。



宝満山第一号磨崖梵字仏拓影
（小西信二氏提供、
『太宰府市史　建築美術工芸資料編』掲載）

宝満山磨崖仏第1号磨崖梵字仏

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

太宰府市公式SNSのフォローお願いします！